



岡山の干拓の歴史

近代の岡山を拓いた男

— 藤田伝三郎物語 —

はじめに

岡山県南に広がる児島湾の干拓地。本格的な大規模干拓は、大阪で豪商として活躍していた藤田伝三郎によって始められました。伝三郎は、明治期に鉱山業や紡績、電力、土木、鉄道、新聞など幅広い事業を手掛けて大阪財界の重鎮となり、「東の渋沢栄一、西の藤田伝三郎」と呼ばれた人物です。

児島湾干拓は、伝三郎が手掛けた事業の中で採算がとれるあてもないという点で特筆すべきものです。広大な干拓地の埋め立てはあまりにもスケールが大きく、成功の保証もない事業だったのです。伝三郎は岡山県の役人から頼まれた干拓事業を引き受け、私財を投じてやり遂げました。広大な国土の創出に夢を感じ、国民のため社会のためにという「国利民福」を掲げて取り組んだのです。

明治32年に着工した干拓は、児島湾内約7000haのうち約5500haを大地に変え、昭和38年に完成しました。この途方もない事業は、伝三郎がいたからこそ成し遂げられたのです。

一方、「青海変じて美田となす」という伝三郎が描いた夢を共有し、泥海の中で干拓作業に従事した人々や、完成後に入植し水不足や塩害に苦しみながらも知恵と努力で克服した人々がいたことも忘れてはなりません。

干拓は、伝三郎と地域の人たちが一緒にあって懸命な努力をしたことで完成し、今では広大な大地となり、豊かな恵みをもたらしてくれています。本作品を通じて干拓の歴史に触れることで、地元への愛着を深め、岡山の明日を担う大人になってもらえることを願っています。

目次

はじめに 1

藤田伝三郎物語

―海を大地に変えた男― 3

藤田伝三郎と児島湾干拓関連年表 23

児島湾干拓の変遷 24

岡山平野の干拓図 26

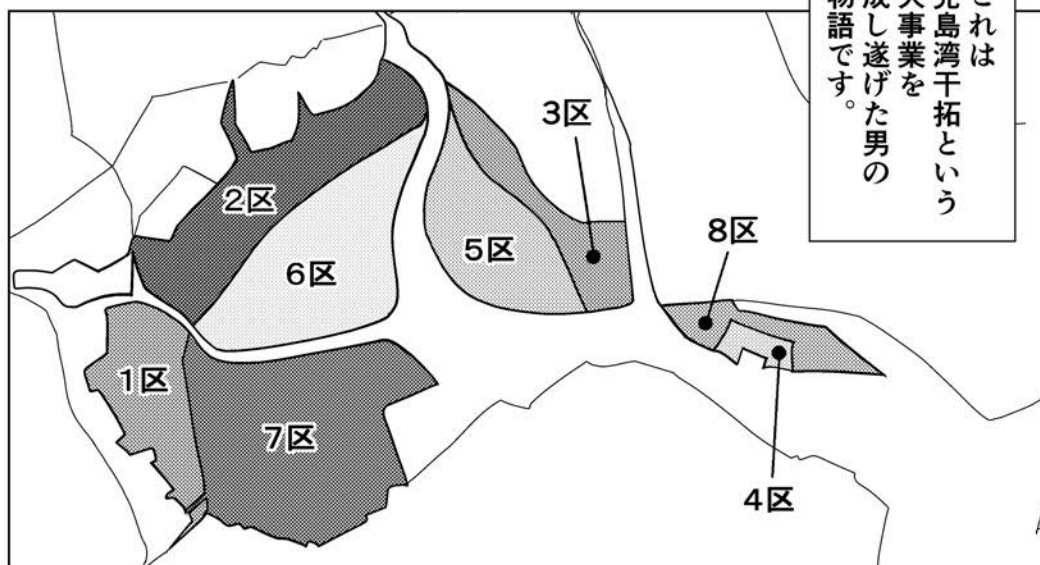
児島湾干拓地の過去・現在・未来 28



藤田伝三郎物語

—海を大地に変えた男—

これは
児島湾干拓という
大事業を
成し遂げた男の
物語です。

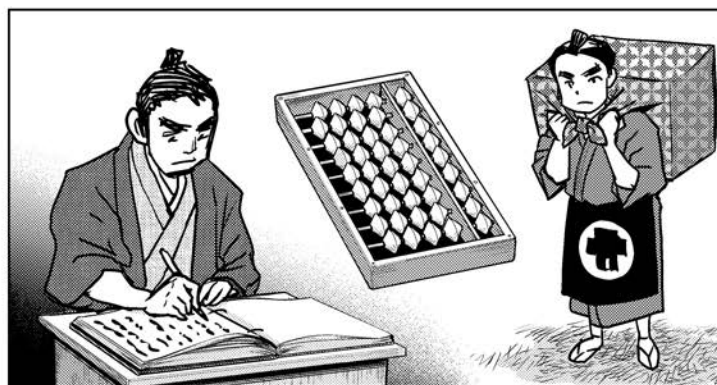


男の名は藤田伝三郎。
江戸時代の終わり1841(天保12)年に
商人の子として長州藩、現在の
山口県に生まれました。

初代総理大臣となった
伊藤博文と同じ年齢。
奇兵隊を創設した高杉晋作は
伝三郎の2つ上です。



伝三郎は青年時代から
商才を発揮し
16歳のときには
商売の傾いた分家を助け
盛り返します。



幕末

江戸から明治に変わる
時代のうねりの中
伝三郎は姉と手代に
分家の商売を任せ



新しい知識を学ぶため
24歳で京都に
向かいます。

同じ長州藩出身の
高杉晋作や
勤王の志士たちを
訪ね

日本の将来について
熱く語り合います。



やがて
明治維新となり
江戸が東京となり
新しい時代が
始まります。

日本の未来を
語った
多くの仲間たちは

政府の官僚となって
要職につき
政治の道へ進みます。

しかし伝三郎は
違っていました。

確かに政治も
大事なことに
違いはない……

しかし
これからの日本が
外国と対等に渡り合い
手を取り合って
いくには

産業を盛んにして
国の力を
蓄えなければ
ならない！

私は
産業を興こし
民間の実業を
盛んにすることだ

日本の
国づくりを
していく！！

そう考えた伝三郎は
その決意どおりに
いくつもの事業を興して
成功させています。

彼が興した会社は
現在も名前を変え
数多く残っている。



Ideas & Chemistry

DOWA



For a Lively World



五代友厚

加えて
大阪商法会議所(大阪商工会議所)
大阪商業講習所(大阪市立大学)を
大阪経済界の重鎮の一人
五代友厚と立ち上げている。



渋沢栄一

大阪紡績
(現在の東洋紡)は
明治・大正時代に
約500もの企業を
育てたあの渋沢栄一と
ともに設立

青年時代の決意通り
日本を代表する
実業家となった
藤田伝三郎。



その彼を
必要とする
人物が岡山にいた。

当時
岡山県庁の職員（勸業課）
だった
いくもとでんくろう
生本伝九郎です。

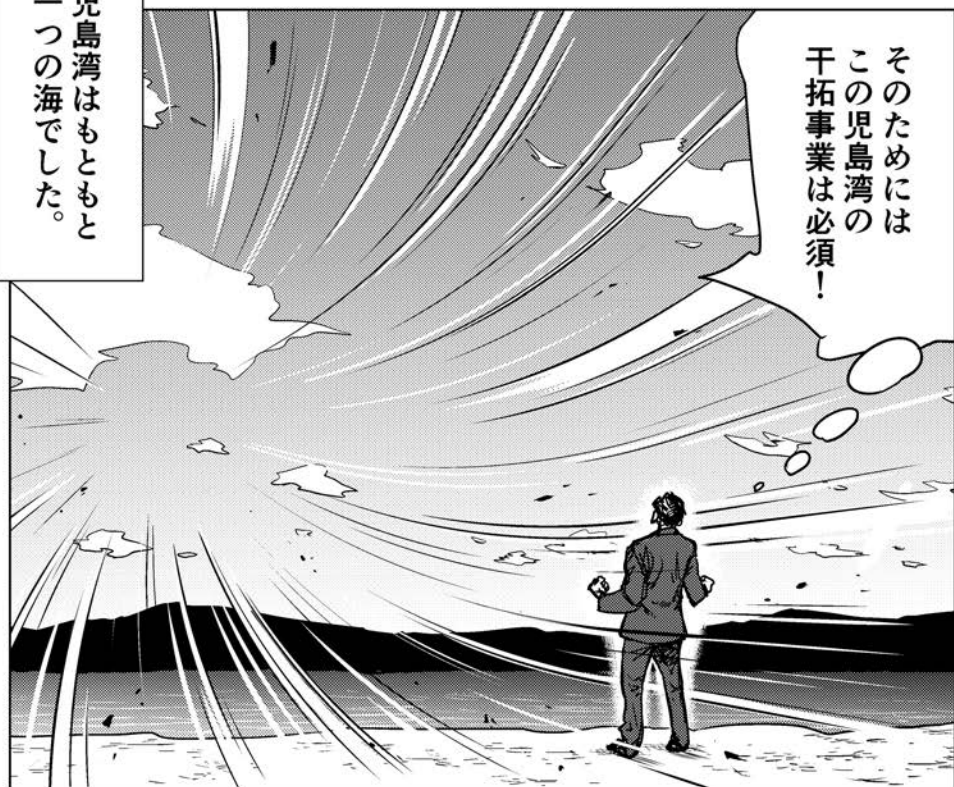


明治に入り
これまで岡山藩主に
仕えていた武士たちが
ろく禄（給与）を失い生活に
困るようになった。

そうした
元武士たちが
今後農業などで
身を立てるための
農地が必要であろう。

児島湾はもともと
一つの海でした。

そのためには
この児島湾の
干拓事業は必須！



東側には
広い干潟が広がり
児島湾と
なっていました。

長い年月を経て
河川からの
土砂の流入によって
児島の西側は
陸続きとなり

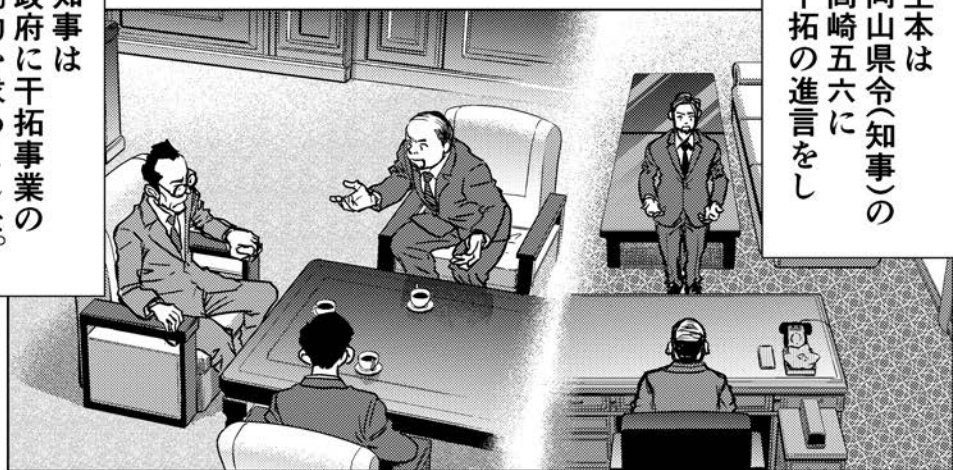
東側

児島湾

西側

生本は
岡山県令(知事)の
高崎五六に
干拓の進言をし

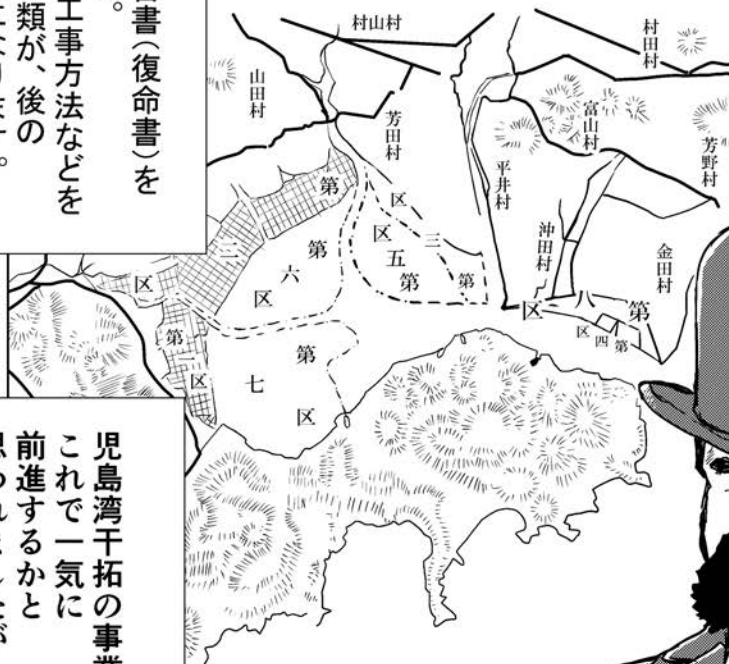
知事は
政府に干拓事業の
協力を求めました。



政府から派遣された
オランダ人技師の
ムルデル
(※ムルデルともいう)が
児島湾を調査し

※ムルデル技師が作った
「児島湾開墾計画図」

精密な報告書(復命書)を
提出します。
この干拓の工事方法などを
記載した書類が、後の
工事の基礎になります。



児島湾干拓の事業は
これで一気に
前進するかと
思われましたが……。



政府は財政難。
資金は地元岡山で
用意しろ
とのことだ！

そんな～

生本は
多くの資産家に
協力を求めましたが
断られます。



なんとかして
資金を
調達しなければ……

万策尽きた
生本が頼ったのが、
大阪財界の実業家
として知られていた
藤田伝三郎でした。



生本は干拓で
農地を広げることの
大切さを熱心に
伝三郎に訴えました。



農地は広がり
失業者が
救われます！

そのような
事業になるかも
しませんが



私に
「泥の中に
金を捨てろ」
と言うのか？



結局、伝三郎は
政府も手を出せなかった
大事業を引き受けたの
でした

伝三郎は
児島湾開墾の許可願いを
岡山県庁に出して
関係者の前で
あいさつをしました。

この事業に
巨費を投じますが
私個人の
利益のためでは
ありません。

国土を広げて
農業や産業を盛んにすること、
それが国利民福である。
こくりみんぶく



つまり、
岡山県民の
そして国民の
利益になります!!

これが熱弁だった
こともあり許可が下り
これから順調に
干拓事業が進むと
思われたのですが……。



児島湾で
漁業をしていた
人たちから
激しい反対運動が
起きます。



裁判になり
長い間
工事に手がつけられ
ませんでした。

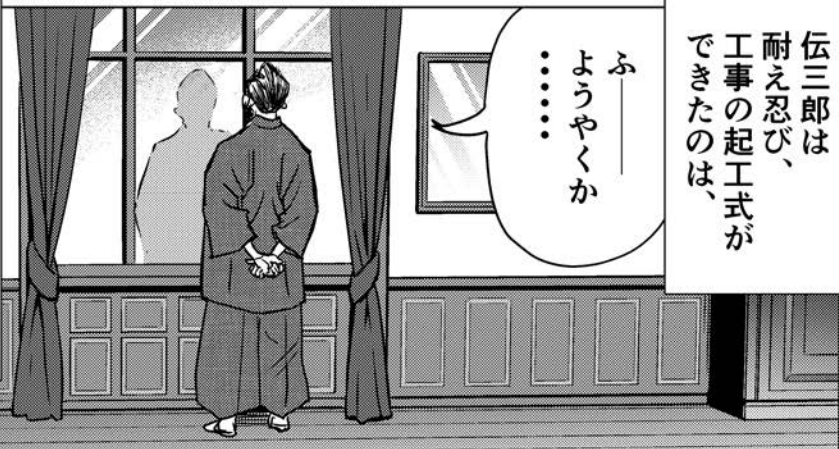


伝三郎は
漁夫らに
生活の保証金を
渡すなど



対応をして
いきますが
反対運動は10年も
続きました。

伝三郎は
耐え忍び、
工事の起工式が
できたのは、



許可願いを出してから
15年後のことでした。

工事を始めると
次の困難が……

児島湾の底は
上流から運ばれてきた
泥が積もり

底なし沼のようで
地盤が弱く……



児島湾に築く堤防は
暴風雨がくると崩れ、

苦難の連続でした。



伝三郎は
そのたびに
資金を使い

いたしかた
あるまい……

まさに泥に
お金を投げ込む
事業となりました。

それでも伝三郎は
信念を持って取り組みます。

この事業は岡山のため
ひいては国づくりへと
つながる……

必ず
やり遂げる！

この事業への
伝三郎の想いを
実際に行っていったのは
伝三郎の会社
藤田組の人々でした。



部下たちは
困難にぶち当たる
たびに



努力と創意工夫で
新しい工法を考え



乗り越えて
いきました。



明治38年に
第1区が
明治45年に
第2区の工事が
ついに完了。

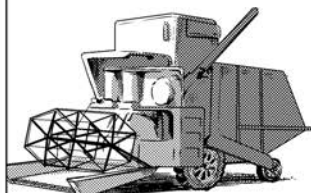
つ……
ついに……

伝三郎は同年
この知らせを聞き
大なる達成感を
感じながらその生涯を
閉じます。

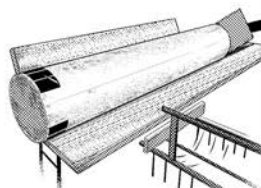
伝三郎の意思は
長男・平太郎をはじめ、
藤田組の人々が
引き継ぎ

開発を進め
新しい土地で
農業経営を開始。

加えて
広大な土地での
農業にあった
機械化も
進めていった。

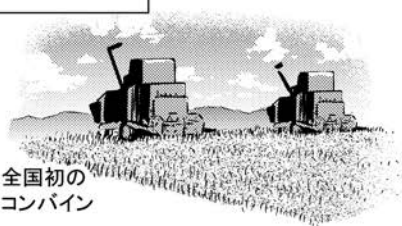


当時のコンバイン

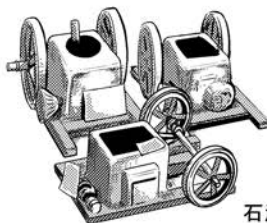


ポータブルポンプ

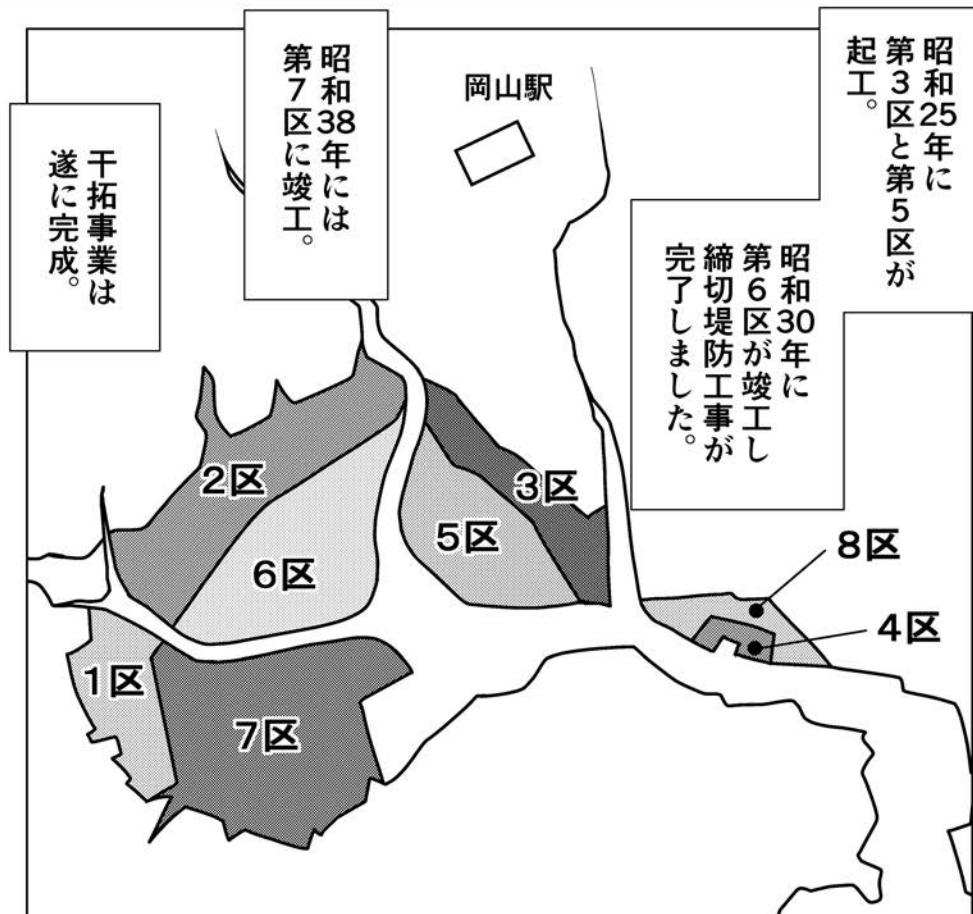
藤田組は
試験場をつくり
干拓地でも育つ
作物を研究。



全国初の
コンバイン



石油発動機



※児島湾干拓の平面図(第4区と第8区は未着工)

海だった場所が
大地に変わった。

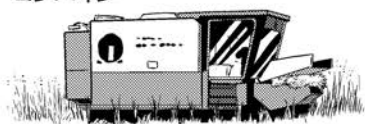


無人トラクター

ドローン



コンバイン



千両なす



イチゴ



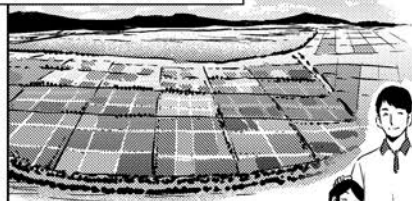
米(酒米も)



玉ねぎ



その場所には
豊富な穀物や野菜が
収穫され
多くの人々が
生活を送っている。



それこそ伝三郎が
どんな苦境の中でも
思い描いていた
姿である。

この大地には
伝三郎の貢献を讀え
伝三郎の名をとった
「藤田」の地名や藤田神社が
今も残っています。



藤田伝三郎をはじめ、
干拓工事や農業経営に
不屈の精神を持った多くの人が携わったことで
海が大地に変わり、現在の姿がある。

藤田伝三郎と児島湾干拓関連年表

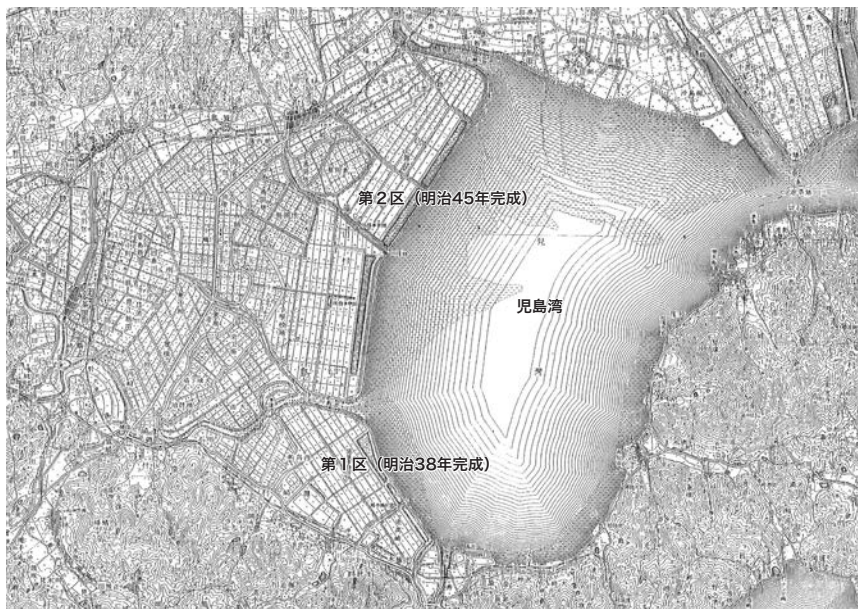
西暦	和暦	出来事
1821	文政 4	興除新田開墾に着手。
1823	6	興除新田が竣工。
1841	天保12	藤田伝三郎が山口県（長州・萩）に誕生。
1869	明治 2	この頃伝三郎が大阪に出て軍靴製造業を営む。藤田組創業。
1877	10	藤田組が製革場を開業（西南戦争により軍靴の需要増大）。
		生本伝九郎が児島湾干拓を高崎五六県令に進言、同県令内務省等に具申。
1881	14	社名変更 藤田組となる（伝三郎は社主頭取）。
		内務省派遣のオランダ技師ムルドルが児島湾を測量。
1884	17	組合による児島湾干拓を岡山県に出願。
		児島湾開墾を藤田伝三郎氏の単独事業による名義に変更。
1889	22	藤田伝三郎に児島湾開墾のが許可される。
1898	31	児島湾開墾の起工が許可される。
1899	32	第一区および第二区の起工式。藤田組と地元漁組の間で漁業補償成立。
1900	33	上郷22町村と藤田組との水利調停が成立。
1905	38	藤田組により第一区竣工。
1907	40	藤田組が農場経営を開始。わが国初の直営機械化農場を開設。
1909	42	十二ヶ郷用水系の汗入水道を改修する。
		宇野線が開通。笹ヶ瀬川・倉敷川伏越樋とかんがいポンプを新設。
1911	44	伝三郎が男爵の爵位を授かる。
1912	45	藤田組により第二区竣工。藤田村創設。
		重要文化財「交趾大亀香合」を入手。伝三郎が死去（72歳）
1913	大正 2	児島湾干拓第三・五・六・七区起工許可。
1917	大正 6	興除村立興除農学校（後の岡山県立興陽高校）設置。
1924	大正 1	大干ばつを機に発動機・パーチカルポンプが普及。
1949	昭和24	岡山県立興陽高校に改称。
1952	昭和27	興陽高校で耕運機大会を実施。
1950	昭和25	藤田組により第三区・五区竣工。
1955	昭和30	藤田組と農林省により第六区竣工。
1956	昭和33	児島湾締切堤防が完成。
1961	昭和36	国道30号完成。
1962	昭和37	岡山空港が完成。
1963	昭和38	藤田組と農地開発営団により藤田組第七区竣工。
1974	昭和49	締切堤防無料化。

参考文献：児島湾干拓および干拓地農業発達史（岡山県立興陽高校、1977）、『近世岡山 殖産に挑んだ人々 1』（吉備人出版、2021）

児島湾干拓の変遷



明治30年 興除新田の東へ、明治32年から1区と2区の干拓工事を始めた。



大正14年 1区と2区の干拓は完成し、1区と2区の堤防が現在の国道30号にほぼ重なる。3区、5区、6区、7区の干拓と児島湾締切堤防はまだなく、児島湾のまま。宇野線（宇野みなと線）は明治43年に運行。



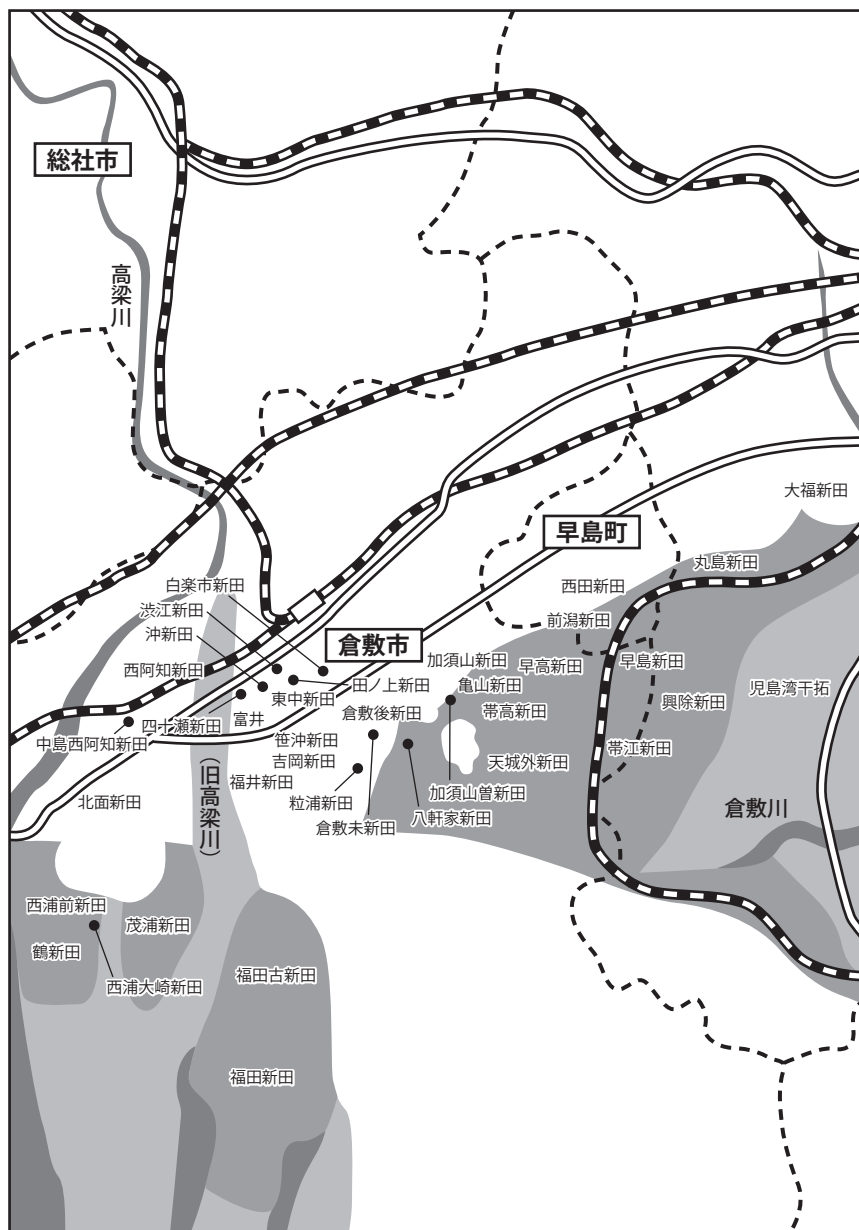
昭和45年 3区、5区、6区、7区の干拓と締切堤防（昭和33年）が完成。締切堤防より西は糸島湖となる。ほぼ現在の地形になる。



昭和45年 明治以降、干拓によって約5,500haの土地が増えた。平成17年に灘崎町は岡山市と合併。糸島湾大橋は昭和58年に完成する。

■地図出典：4 図とも国土地理院発行の地形図を加工して作成





「岡山平野鳥瞰記—永忠と蕃山—」(中国四国農政局山陽東部土地改良建設事務所)の「岡山平野の干拓年代図」を参考に1部改訂

児島湾干拓地の過去・現在・未来

困難を乗り越え、農業機械の先進地に

湾や干潟を干拓するには、沖合の堤防予定地に木の枝などを集めた粗朶^{そだ}を敷いて、その上に船で運んだ割石を投下し堤を築く潮止め工事をしました。できたばかり

の干拓地は塩分が含まれて稲作ができません。塩分を抜くために幾筋もの溝を掘って排水をよくし、何年もかけて塩分濃度を下げていきました。干拓地では飲み水や生活用水の調



堤防を築くための潮止め工事
(岡山県立興陽高等学校所蔵)

達に困り、新田が広がるにつれて大量の灌漑用水を引いてこなければなりません。水不足や塩害は日常的でした。水路の開削などはすべて手作業だったため、重労働を強いられました。人々はどんな困難も不屈の精神で乗り越えていきました。

広大な土地で農業をするなかで、できるだけ労働を省くため、機械化を目指すようになりました。早くからトラクターなどを輸入し、農民と鍛冶屋などの工業社が一緒に研究しながら、農機具を



耕運機競技大会（岡山県立興陽高等学校所蔵）



無人トラクターによる耕作作業
(有限会社国定農産提供)



ドローンによる散布作業 (有限会社国定農産提供)

考案しました。発動機（エンジン）を使って用水を田に引き入れるポンプや発動機を動力にした耕運機など、必要とする機械を工夫して作り、田植え機や脱穀機、乾燥機なども使われるようになりました。こうして農業機械を開発する多くの業者が競って優れた農機具を考案して使うようになりました。岡山県は「農業機械の先進県」になりました。

未来が広がる「スマート農業」

現在の干拓地には、岡山県の農業の中心ともいえる穀倉地帯が形成され、水稻を中心に二条大麦のほか、千両なすや玉ねぎ、レタス、れんこんといった多様な高収益の作物が栽培されています。

省力化をしながらも高品質な農作物を栽培するため、近年ではロボット技術や情報通信技術（ICT）を活用した「スマート農業」の

取り組みも進んでいます。例えば、ロボットを使った無人トラクターやスマホで操作する水田の水管理システム、ドローンを使った薬剤等の散布作業など、先端技術による作業を実現している農家もあります。

藤田伝三郎の強い信念で実現した広大な干拓地で人々は暮らし、先進的な農業が実現しようとしています。



一般社団法人
岡山県建設業協会

<https://www.okakenkyo.jp>



廣榮堂 安政三年創業
岡山中納言角

<https://koeido.co.jp>

コンケン・グループ



<https://konken.jp>



大成建設

<https://www.aisei.co.jp>

DOWA

DOWAホールディングス株式会社

<https://www.dowa.co.jp>

RIPRO

Corporation, Japan

<https://www.ripro.co.jp>

著者プロフィール

今谷鉄柱 (いまたに てっちゅう)

漫画家。著作『県庁の星』『マンガ版：DaiGo超集中力』
『渋沢栄一：まんが超訳/論語と算盤』など。

岡山の干拓の歴史

近代の岡山を拓いた男―藤田伝三郎物語―

2021年12月19日 初版第1刷発行

編集―吉備人出版編集部

作画―今谷鉄柱

脚本―金澤健吾&今谷鉄柱

発行―吉備人出版

〒700-0823 岡山市北区丸の内2丁目11-22

電話 086-235-3456 ファクス 086-234-3210

ウェブサイト www.kibito.co.jp

メール books@kibito.co.jp

© Kibito 2021, Printed in Japan

無断転載禁止。許諾は吉備人出版まで